

軍城早秋

嚴

武

昨夜秋風漢関に入る

朔雲辺月西山に満つ

更上飛将を催して驕虜を追わん

沙場の匹馬をして還らしむる莫

【作者】嚴武(七二六〜七六五年)唐の武将。字は季鷹。華州の人。肅宗の時、劍南節度使となり、吐蕃(今のチベット)を破り、礼部尚書となり、後、鄭国公に封じられた。杜甫のよい理解者であった。

【語釈】*軍城早秋…駐屯軍の本拠地の町での初秋。 *早秋…初秋。陰曆七月。 *漢関…漢民族が護る山間の道のとりで。 *山…北方の

異民族の地の雲や辺疆に降る雪が(チベットと境界を接している)蜀の国の西の方の山に満ちてきた。 *朔雲…北方のえびすの地の雲。北方の雲。 *飛将…前漢の名将軍・李廣(李広)のこと。 *追…おう。追撃する。 驕虜…驕り昂ぶっている異民族。 *沙場…(砂煙が起ち上がる)戦場。 *匹馬…一匹の馬。 *還…出かけていた者がくると向きを変えてもどる。

【通釈】昨夜は秋風がわが城塞にも吹き、北の蛮地にわく雲、辺境を照らす月の光が西山の峰々に満ちわたった。今度こそ、わが信頼する勇将をして蛮族どもを徹底的に追撃するつもりだ。砂漠の戦場を駆け巡る蛮族の騎馬を、一匹たりとも生きて帰してはならない。